

平成 30 年度 第 1 回 松江市総合教育会議 会議録

日 時：平成 30 年 11 月 7 日(水)15:00～

場 所：島根県市町村振興センター6 階 中会議室

出席者：松江市長 松浦正敬
松江市教育長 清水伸夫
松江市教育委員 伊藤由紀夫、多々納道子、藤原 文、金津式彦
市立小学校教諭 奥村忠孝 校長、横田ミチル 教諭、青木諭子 教諭（内中原小学校）
石富 亨 校長、成相政明 学力向上支援員（湖東中学校）
糸原 淳 校長、桔梗亜紀 教諭（本庄中学校）
市長部局 政策部長 井田克己、政策部次長 高木 博
教育委員会事務局 高橋良次 副教育長、古藤浩夫 副教育長、杉谷 薫 教育委員会次長、
学校教育課:三賀森卓司課長、川上淳一 指導研修係長、濱岡宏之 指導主事
教育総務課:永田幸子 総務係長、岡野敬祐 主任

○（事務局）三賀森 学校教育課長

失礼します。お知らせしておりました時間よりも少し早いのですが、皆様お揃いになりましたので、これから始めさせていただきます。

皆様には大変お忙しい中、お集まりいただきましてありがとうございます。これより平成 30 年度第 1 回松江市総合教育会議を開催いたします。

それでは、開会に当たりまして、松浦市長より御挨拶申し上げます。

○ 松浦市長

それでは、皆さんこんにちは。今日は大変皆様方お忙しい中でございますけれども、今年度第 1 回の総合教育会議を開催いたしましたところ、皆様方にはお集まりを賜りまして、誠にありがとうございます。

それから、教育委員の皆様には、日頃より本市の教育施策の推進にご尽力を賜りまして、誠にありがとうございます。

この総合教育会議でございますけれども、平成 27 年の 4 月に第 1 回を開催いたしております。これまで 7 回の会議を開催しまして、昨年度は教員の多忙化、業務の適正化、それから小学校英語の早期化・教科化につきまして協議を行ってきたところであります。その都度、今、問題になっているテー

マを選びながらやらせていただいているところでございます。

この場でいろいろといただきました御意見を、採用できるものにつきましては積極的に採用させていただいているということでございます。例えば、英語の関係でいきますと、ICT 機器の整備の予算措置を行ったり、具体的な施策、あるいは事業への反映というものもしてきたところでございます。

本日は、本市の重要課題であります子どもたちの学力の育成についてということと、改定時期がきております教育大綱の改定の2点をテーマとさせていただきたいと思っております。

学力向上につきましては、今、全国各地でいろいろな工夫をされているものと思っております。今日はお集まりを賜りましたそれぞれの学校での、非常に先進的な取組を行っておられる取り扱いにつきましてお話をいただいて、いろいろと意見交換をし、また、他の学校に取り入れられるものについては取り入れていくと、このようなことでやらせていただきたいというように思っているところでございます。

是非よろしくお願ひ申し上げたいと思ひます。

○（事務局）三賀森 学校教育課長

ありがとうございました。

本日は学力育成について、それから教育大綱の改定について、この2点につきまして、皆様ご議論いただきたいと思っております。

それでは、はじめに学力育成について、事務局のほうから説明をさせていただきます。

○（事務局）学校教育課 川上 指導研修係長

失礼します。学校教育課指導研修係長の川上です。私のほうから、4月に行われました全国学力・学習状況調査の調査結果の概要と、調査結果から分かる課題、そして学力育成の取組等について、まず簡単に説明をさせていただきます。座って説明させていただきます。

資料1をご覧ください。昨年度から、県、市、各校の学力調査結果は整数値公表になりました。小数値で公表される全国平均と単純に比較はできませんが、今年度、全国、島根県、そして松江市の平均正答率を見ますと、中学校理科を除いた全ての教科で県平均を上回っているか、ほぼ同じ状況であることが分かります。しかし、全国平均と比べると、小学校国語Bを除き、あとの教科は下回っているか、ほぼ同じ状況となっております。

各教科との強みと課題は2ページに記載しております。児童生徒質問紙からは、松江市では地域社会とのつながりや関心が高い児童生徒が多いといった特徴や、家庭での学習習慣が向上しているといった状況が見て取れます。

しかし、学習面ではここ近年、教科によっては全国との差は縮まり、改善傾向は見られるものの、

依然、全国との差がある状況が続いております。

経年での様子を見てみますと、3 ページ、資料 2-1 をご覧ください。上の表が小学 6 年生、下が中学 3 年生の結果です。同じ色で示しているのが同一集団になります。それぞれ市平均と下の括弧が全国平均になり、右の数字は市平均が全国と都道府県順位で並べたとき、松江市が何位になるかを示しております。今年度、平成 30 年度の中学 3 年の順位と、平成 27 年度の小学 6 年時の順位を比べてみますと、上がってきていることが分かります。

平成 26 年度から、松江市で学校別学力調査結果の公表が行われてきましたが、各校で調査結果から分析が行われ、改善に向けて対策が進められた成果であると見ることができます。

年度によって違いはありますが、4 ページ、資料 2-2、こちらに県学力調査も含めた調査結果を載せておりますので、ご覧ください。緑の部分が全国調査、白の部分が県調査の結果になります。

各年度の県学力調査の差をご覧くださいますと、県平均を下回る教科が赤字で示しておりますが、その数は平成 27 年度以降少なくなり、29 年度以降は県平均を全て松江市は上回っております。しかし、全国学力調査の算数・数学につきましては、平成 26 年度から全国平均を下回る状況が続いております。

5 ページ、資料 2-3 をご覧ください。平成 27 年度以降の全国学力調査における算数・数学の領域ごとに結果を表にしたものです。全国平均との差を分かりやすくグラフにしたものが次の 6 ページ、資料 2-4 になります。

年度によって違いはありますが、全国平均との差を見ると、依然として小学校では図形、中学校では関数を苦手とする児童・生徒が多い状況が見て取れます。各校で授業改善や授業以外の学習時間の増加等の取組が進められ、特に中学校では、各領域で全国平均を下回っておりますが、その差は年々縮まってきており、小学校のときに苦手になっていた図形においても、数学 B におきましては、今年度、全国平均を上回り、改善傾向が見られております。

しかし、小学校における図形において、今年度、A 問題で 3.3 ポイント、B 問題では 5 ポイント全国平均を下回り、全国との差が更に開いてきております。

次に 7 ページ、資料 2-5 を開いていただきますと、算数・数学における正答問題数の度数分布表が出ております。ピンクの棒グラフが松江市の結果です。大変見づらいですが、ひし形の折れ線グラフが島根県、四角の折れ線グラフが全国の結果になっております。

右上の平成 30 年度の算数 A を例に見ますと、全部で 14 問中、全問正解だった児童が松江市では約 5%、県もほぼ松江市と同じ 5%になり、全国では約 7%という表の見方になります。

年度によって問題数や難易度に違いはありますが、どのグラフを見ても小中学校ともに、松江市は全国と比べ上位層が少なく、中位層に人が集まっている状況であることが分かります。決して力のある子どもがいないというわけではなく、その力を伸ばしきれていない。下位層の底上げが十分に図れ

ていないという現状であり、この上位層を更に伸ばし、下位層・中位層の児童・生徒を上位層に引き上げていく取組が必要だといえます。

そこで、市内でも市の事業や各校で独自に工夫された有効性のある取組をされている、本日お越しいただきました内中原小学校、湖東中学校、本庄中学校の3校の紹介をさせていただきます。

まず、3校の今年度の学力調査の結果が8ページ、資料3-1にあります。ご覧ください。こちらは平成30年度の中学3年生が、前回、27年度の小学6年時、その調査結果を比べた表になります。赤が全国平均値をマイナス2ポイント以上、黄色がマイナス2ポイントから0ポイント下回り、白が0から1、緑が1から3、青が3ポイント以上上回っている色になっております。

この後各校から詳しい説明がありますが、内中原小学校では、今年度から学力向上非常勤講師を配置し、まだ成果についてはこれから出てくると思われませんが、若手教員の育成という点でお話を伺います。

湖東中学校では、平成27年度に全国平均を下回っていた校区内の小学6年生が、中学3年時にはこの赤の色がなくなり、特にB問題でも大きく改善に向かっているのが分かります。

本庄中学校では、小学校のときには全国平均を大きく下回っていた児童が、中学3年時には全ての教科において全国平均を大きく上回った結果になっています。

各校の特徴的な取組を9ページ、資料3-2に簡単に記載しております。ご覧ください。内中原小学校においては若手教員の育成として、優れた指導をされている授業リーダー教諭の下で、教職経験の浅い先生が1日リーダー教員の指導を直に見て学び、自らの指導に生かすといった取組です。

湖東中学校では、こちらも松江市が学力向上対策として配置している学力向上支援員を昨年度から有効に活用され、学力向上に向けた取組を進められています。

本庄中学校では、小規模校ならではの利点を生かし、生徒に対してきめ細かな指導がなされ、全教職員で共通の認識の下で8つの学力向上プロジェクトが進められています。

各校の取組については、この後本日お越しいただいている各校の先生方から詳しくお話をさせていただきます。

それでは、私からの説明は一旦終わらせていただきます。

○（事務局）三賀森 学校教育課長

続きまして、今、担当の者の話の中でも紹介しましたがけれども、市内の学校の中で学力向上対策が進められて、成果を上げている3つの学校から、校長先生並びに教員の先生が参加しておりますので、ご紹介させていただきます。

皆様から見られて右側からですが、内中原小学校の奥村忠孝校長です。

- 内中原小学校 奥村校長
よろしく申し上げます。

- （事務局）三賀森 学校教育課長
同じく、横田ミチル教諭です。

- 内中原小学校 横田教諭
横田です。よろしく申し上げます。

- （事務局）三賀森 学校教育課長
そして、青木諭子教諭です。

- 内中原小学校 青木教諭
よろしく申し上げます。

- （事務局）三賀森 学校教育課長
続きまして、湖東中学校の石富亨校長です。

- 湖東中学校 石富校長
よろしく申し上げます。

- （事務局）三賀森 学校教育課長
同じく、成相政明学力向上支援員です。

- 湖東中学校 成相学力向上支援員
よろしく申し上げます。

- （事務局）三賀森 学校教育課長
そして、本庄中学校の糸原淳校長です。

- 本庄中学校 糸原校長
よろしく申し上げます。

○（事務局）三賀森 学校教育課長

同じく、桔梗重紀教諭です。

○本庄中学校 桔梗教諭

よろしくをお願いします。

○（事務局）三賀森 学校教育課長

この3校の取組と成果につきまして、これより学校ごとにお話させていただきたいと思います。

それでは早速、内中原小学校からお願いします。

○ 内中原小学校 奥村校長

それでは失礼いたします。内中原小学校の校長の奥村と申します。

今日は、本校で今年度からやっております授業力・学力向上のための取組であるリーダー教員制度について、少しお話をさせていただこうと思います。

この制度そのものは、私のほうからは制度設計について、極々簡単にお話をさせていただいて、その実際がどうであるかを横田と青木のほうからお話を申し上げるという形になります。

まず、制度についてですけれども、この学力向上のためには、教師の指導力の向上が欠かせないという基本的な考えを基に、昨年度のところで、市の小学校校長会から市教委のほうに学力向上策の一つとして提案し、市教委が今年度から事業として行ってくださっているものです。

この制度は、校内にモデルとなる学習指導上、あるいは学級経営上優れた力量を持つ教員をリーダー教員として指定し、そのリーダー教員の教育活動を、基本的に丸一日、他の教員が参観したり、共に行ったりすることを通して、他の教員の指導力向上を目指すというものです。少し言い方は悪いかもしれませんが、一日弟子入りをして学ぶという形をしているものです。学校におけるOJTを推進するというようにお考えいただければと思います。

この形でのOJTをする上で困難であったのが、リーダー教員に付いている教員の、その教員にも自分のクラスがあるわけですから、そのクラスがほったらかしになるといけないので、そのクラスをどうするかということが問題だったのですけれども、その補充のために授業を1人でできる非常勤講師を制度実施校に配置していただいて、そのクラスの補充を行っているという形になって、このOJTが可能になっているものです。

内中原小学校では、40代の教員2人をリーダー教員に指定して、採用2年から9年目の若手の教員5人を弟子入り、リーダー教員に付くものとして指定しております。そして、リーダー教員は基本的

に各週 1 日ずつ、月 4 日、これらの教員の受入日の設定をします。うちの場合は、リーダー教員は 2 人ですから、各週 2 日、月 8 日間の受入日があります。この 8 日間のところに 5 人のリーダー教員が順番に入っていくという形になります。

なお、他校から来る場合は、そのクラスの補充というのは、校内のほうで何とか頑張ってやっただいて、補充というのはないのですが、それでも良ければ、うちのリーダー教員制度に参加することができます。

実際にリーダー教員 1 人につき各月 2 日、2 人ですので月 4 日間の他校からの受入日を設けています。それを市内の小学校に周知して、現在までのところ、1 学期に竹矢小から 1 名、恵曇小から 1 名、2 学期に古志原小から 1 名、朝酌小から 1 名が既に参加され、このあと 11 月の末になりますが、竹矢小から 1 名が参加したいという旨を申し出ておられます。

成果なのですけれども、後でこの 2 人が詳しく言うと思うのですが、私が思うのに、一日丸ごと付くということの成果、それから、5 月からやっているのですけれども、何度も同じ学級に入る効果というのがあると思います。

その効果としては、まずはやはり授業力です。誰もが参加できる授業、どの子も全員が自分なりの考えを持ってそれを発表する授業、分かる楽しさのある授業、それから、これは私が一番好きなのですけれども、子どもが燃える授業とか、「このようにしたら良いのか」「こういう発問をすると良いのか」「こういう板書が有効なのか」ということを直にリーダー教員の姿を見て、そのリーダー教員制度の利用者がそれを学んでいくということが出来ます。

続いて、指導力です。これは授業力も入るのですけれども、例えば学級経営の力です。その子のバックボーンを探ると言いましょうか、今までの成り立ちとか、家庭等の様子等も学級担任は掴んでいるわけなので、それを生かしてその子たちを指導すると、自然に子どもが納得すると言いましょうか、心に落ちると言いましょうか、心に入る指導をすることができるのですが、そのことの大切さというのを若手の教員たちが学んでおります。

それから、これは一日付くことの効果だと思うのですけれども、休み時間も付いています。よく子どもたち同士のトラブルが起きるのは、休み時間が圧倒的に多いです。そのときに、それに対してどう対応するかというようなことを間近で見て、それを自分の学級でも同じことがあった場合にはやるということ。

それから、これはあまりないのですが、保護者対応もある。そういう場合があった場合は、その姿を見ることもできるのかなというように思っているところです。

それから、何度も同じ学級に入る効果としては、やはりリーダー教員の指導によって、5 月からここまでで子どもたちが徐々に変わっていく姿で、「最初はこうだったのだけれども、誰もが自分の意見を持って授業に参加できるようになったな」とか、あるいは子どもに任せる部分と言ってい

るのですけれども、子どもたちが任せられることに喜びを感じて、「自分たちで授業を進めているのだ」とか、そういった変容、変わっていく姿をつぶさに捉えることができる。これもこの制度の良さというように思っております。

それから、全体的なこととしましては、授業方法等のスキルはもちろんなのですけれども、子どもを信じること、あるいは伸ばそうとする願いを持つこと。願いを持つだけでは変わりませんので、その願いを実現するために、どういう手立てがあるのかということを考えるというような、リーダー教員の教師としての心構えと言いましょか、心情、そういったものにも触れて、現在の自分のそれ、「今の自分はそれに比べてこうだな」というように、それを見つめ直すことができる良い機会ともなっているなど。これも大きな効果の一つだろうなというように思っているところです。

学力向上の土台は学級経営にあるということも言えますので、これらの制度によって、教師一人ひとりが指導力を高めていくというのは、その成果は学力向上の面でも大きな実を結ぶであろうというように確信しております。

今年度は本校、内中原小学校のみで実施している制度でありますけれども、これが徐々にまた広がっていくと嬉しいなというように、個人的には感じているところです。

以上です。それでは続いて横田のほうから。

○ 内中原小学校 横田教諭

内中原小学校の横田です。よろしくお願ひします。

私はリーダー教員を引き受けるにあたって、私自身が何を大切に子どもたちの前に立っているのかということを考えました。この研修を通じて、先生方の報告書を読みながら、改めて自分が大切に、また、若い先生方と共有することができたと感じている2つの点について、詳しくお話をしたいと思います。

1つ目は、子どもを信頼するということです。資料を読んでいただくと分かると思うのですが、先生方が、自分のことは自分で決めるということの大切さに気付いておられます。なぜ、自分のことを自分で決めることがそんなに大切なのか。

まずは、子どもの中にある成長していこうとする力を引き出していくためです。私は1年生の担任ですが、授業でも生活でも小さな1年生であっても、子どもの考えや気持ちを聞き、子どもに自分のことは自分で決めていく場面というのを繰り返し、そして多く持つようにしています。

自分のことを自分で決めようとするときに、子どもたちは経験を基に考えます。その際に、新しい選択肢を教えていきます。そうすることで、子どもたちは視野を広げたり、思考力や判断力を伸ばしたりすることができるからです。

そして、何より自分で決めることができているということは、「自分は大切にされている」、「自分は

信頼されている」と子どもたちが感じるができるということです。そして自信を持ち、学習でも生活でも自ら自発的に行動できるようになっていく子どもたちというのを、私はこれまでもたくさん見ることができました。

「子どもを信頼する」と言うのはとても簡単なのですが、学校のどのような場面で、どのように実践していくと良いのかというのは、実はとても難しいです。特に小学校では子どもが小さいので、つい教師が子どもを未熟な存在と見やすくなり、過度に管理的になってしまったり、教師の考えを押し付けてしまったりしがちになります。

そうすると、子どもは自分の力を信じることができなくなり、言われたことだけをやるようになり、自分で考えることはせず、他人任せになったりします。中には自信をなくしてしまって、挑戦することすら止めてしまう子どもも出てきます。そのような関係では、学習もやらされているという気持ち強い勉強になってしまい、自主的な意欲や持続していく力というのを生み出すことは難しいと思います。

リーダー研修の中で、1年生が自分のことを自分で考え、決めていく力があるのだということを実際に見てもらったことができたのは、研修に来られた先生方が、自分の学級の子どもにもそういう力があるのだと信頼していくうえでは、とても貴重な経験になったのではないかと考えています。

2つ目は、学校で学ぶことの良さです。学校で学ぶことの良さは何なのか。それは集団、友だちと学ぶことができるということだと考えています。授業では、いろいろな教科の学習課題を軸にして、自分と他者の考えを比べたり、ときには意見を対立させたり、ときには1つの答えに向かって話し合ったりしながら学習を深めていきます。授業の中で自分を表現し、友だちを受容し、集団としても個人としても成長していくのです。

私はこれまでの経験から、そのような集団にいると子どもが感じると、子どもたちは自ら学ぶことの楽しさを感じ、学習意欲を高めていっていると思っています。

そのために必要なことは何なのか。資料2に繰り返し出てくる言葉があります。それは安心感という言葉です。子どもたちが学級集団として活発に学習するためには、間違いや失敗が受け入れられる、安心できる場であることが大切になります。

しかし、大切であることは分かっているのですが、安心感という目には見えないものを学級にどのように生み出していくのかというのは、言葉で伝えていくのはとても難しいです。

リーダー研修で1日一緒に過ごすことができるからこそ、見に来られた先生方は教師と子どもの関わりや、子どもと子どもの関わりの中に安心感をつくっているヒントとなるものを見つけ、実感を基にしながら自分の実践へと動き出していかれているのが分かります。

この2つのほかにも、研修に来られた先生方は多くのスキルや考え方を、自分の気付きとして自学級へ実践していわれています。実は、その多くは、これまでも知っていた、本にも書いてあったよう

なことがたくさんあります。

しかし、教師の技術や知識というものの多くが、知っていてもどのタイミングで、どのような子どもに、どのようなやり方で、どのくらいというところの力加減がとても難しいものがあります。確かな技術として身に付けていくには、かなりの時間がかかると思われます。

それが今回、1日という長い時間、繰り返し実際の場面を見る機会を得たことで、分かりやすく実践につながったのではないかと思います。私自身もまだまだ子どもたちの姿から学び、研修していく立場です。今回、たくさんの先生方と話し合い、私自身の実践を振り返ることができて、多くの学びを得ることができました。今後も私自身も生かしていきたいなと思っています。ありがとうございます。

○ 内中原小学校 奥村校長

それでは、説明は以上なのですが、ここに内中原小学校 青木教諭を連れて来ております。急遽、午前中にこちらに一緒に来るということになりまして、心の準備が何もできていないので、そのままの自分の感想を言って、思いをこれから語ってくれると思いますが、このあと質疑応答でまた是非聞いてやってください。よろしくお願いします。

以上です。

○ (事務局) 三賀森 学校教育課長

ありがとうございました。

本来の予定でありましたら、3校全てお聞きしたあとに質疑応答したり、御意見を伺う時間を取っておりましたけれども、今、内中原小学校 奥村校長からありましたように、急遽青木先生に来てもらいましたが、これからまた学校に戻って校務のつづきをされますので、内中原小学校の今の発表につきましての御意見や御質問がありましたら、ここでお受けしたいと思います。

どなたからでも構いませんので、何かありましたらお願いします。

○ 清水教育長

実は、私が今日急遽お願いをしました。

まず、青木さん。事前にこうした感想は提出していただいていますので、いろいろなことが書かれていることは分かりますが、まず、単刀直入にこの取組について、どう思われましたか。こういうリーダー教員について。しかも1日ですよ。

○ 内中原小学校 青木教諭

私は9年目となり、若手と言えるかなというような年齢に達しています。ですが、今の自分の経験値のときに、こうした勉強の場をいただけるということは、とてもありがたいことだなというように感じました。

1日というのは、研究授業として見るものとは全く違う視点があるなと思いました。先ほども出ていたのですが、その1日の間にたくさん起こる子どもと先生とのやり取りや、そうした授業以外の場で学ぶことはとても多かったなと思っています。

学校にいるということは、授業はもちろんなのですが、それ以外の場で子どもたちと関わる時間というのは、授業と同じくらいあるなと思っています。その中で先生方がどうされているのかというのを、自分の学級にいると見えないこと、また、自分を見つめ直すような時間が目の前のことに追われていて取れないので、こうした俯瞰する立場で見させてもらうことで、自分だったらどうするのか、次はこうしてみようかなというような考える機会をいただけたかなと思っています。

○ 清水教育長

もう1点だけ、横田さんの授業を見て、今後、自分がどのように授業を組み立てていくかという、イメージ的なものは湧いていますか。

○ 内中原小学校 青木教諭

私は感想にも書いているのですが、今まで低学年の担任が多かったのですが、今年は初めて5年生を担当しております。子どもたちに対して、すごく管理的になってしまう。全て「みんながきちんとできない」というところがすごくありました。

5年生を持つにあたって、1年生以上に自分の考えをしっかりと持っている子どもたちに対して、「これをして」「あれをして」と段取りを全て指示するように4月の段階ではしていて、その中からリーダー教員の先生の姿を見る中で、先ほども横田先生が言っておられたのですが、私も自分自身が管理的だということはすごくよく分かっていたのですが、どこをどう直せば良いのかということがなかなか掴めずにいました。

ですが、実際に子どもたちに任せておられる姿を見て、「この程度、子どもたちのほうに任せても大丈夫なのか」「1年生がこのようにできるのだから、5年生はここをこうしてもできるな」というようなことが学べたので、こういうところで学級経営に生かすことができました。

授業の中で、子どもたちに任せる場面というのを、1学期の初めに比べると、たくさんつくることができるようになってきたのかなと自分では思っています。本当にきちんと子どもたちにその力が返しているかは分かりませんが、私の心の中では、すごく意識が変わったなと思っています。

○ 清水教育長

ありがとうございました。頑張ってください。

○ 内中原小学校 青木教諭

ありがとうございます。

○ 松浦市長

私も現場に行っていないので良く分からないのですが、具体的に、任せるというのは、どういうことを見て任せているというように感じたのですか。

○ 内中原小学校 青木教諭

例えば、子どもたちのトラブルが起こったりしたときに、1年生なので、私なども前に見たときには、話を聞いて、「こう思っているけれども、どうなの」と、とにかく仲介役のように、弁護士とか、裁判官のように自分が間に入ってやるが多かったのですが、横田先生は、子どもたちのほうに、「嫌だったり、どうしてほしかったか言ってごらん」ということを言われ、それを言っているのをずっと聞いておられて、「では、どうしたら良かったと思う」というように問い返されて、子どもが自分はどうしたかったのかということをしやべり出したら、先生は「どうしたら良かったと思う」という問いかけの中で、子どもたちが自然に「自分はこうすれば良かったのか」「自分はこうしてほしかったから、次はこうしよう」というような解決策が見えてくる場面がたくさん見られていて、私の「次はこうしなさい」というのは、やはり子どもたちの心の中には落ちないのかなというのを、引いた立場で見て改めて思いました。

○ 松浦市長

要するに自分で考えさせるという、なかなか難しいですよね。時間もかかったり。時間を気にすることがあるかもしれないですね。そのトラブルを解決するためには、限られた時間の中でやらなければいけないですから、つい先回りして結論を出してしまうというようなことがあるかもしれないですね。その辺りの課題が非常に難しい。

○ 内中原小学校 奥村校長

難しいですね。

○ 内中原小学校 横田教諭

それは時間がかかるのですけれども、1学期を大切に、子どもたちにその習慣を付けていくと、やはり2学期、3学期は、楽になるという言い方が正しいかどうか分かりませんが、子どもに力が付いてきますので、やはりだんだんトラブルは減っていきます。私の若いころの経験でいうと、それをしないで担任がずっと入っていくと、3学期までずっと入り続けるパターンが1年間続くかなと思っています。

○ 内中原小学校 奥村校長

自分で考えるという習慣は、学習で何かの課題を迫るときにも大きな力を発揮してきます。これは大事にしていかなければいけないのかなというように思っています。

○ 多々納 教育委員

すみません、お尋ねしてよろしいでしょうか。本当に今日はありがとうございます。教育委員の多々納と申します。1点質問させてください。

小学校は1年から6年まで非常に長いですが、横田先生は1年生の担任でいらっしゃるって、青木先生は5年生の担任ということですが、1年生でのいろいろな手法と5年生での発達を踏まえた手法で、ギャップがあるというようなことはありませんでしたか。

○ 内中原小学校 青木教諭

もちろんありましたけれども、私自身、1年生の経験もありましたので、そうした目線で見ることができましたし、1年生がこうなので、下を同じ系列で見ながら5年生を見ることができる良さというのありました。

また、本校はリーダー教員の先生が2名おられて、私と同じ学年部のほうにもリーダー教員をしておられる先生がおられて、そこでの学びもありました。また全然違う学年に行く良さというのすごく感じることができました。

この1年生と全く同じことを生かせる場合もありますし、5年生向けにやるのであれば、「こうしてみようかな」というようなことも感じることができました。

○ 多々納 教育委員

ありがとうございます。低学年と中学年とか、高学年とか、複数の先生の良い面を学ばれているということで、良い効果が出ているのではないかと思いますので、今後、ほかの学校にも指導力向上のため非常勤講師の先生方を配置するのであれば、是非複数配置をお願いしたいなと思いました。よろしく申し上げます。ありがとうございます。

○ 伊藤 教育委員

今、学力の関わりということで、市長がおっしゃったようなことで、待つとか、自分で考えさせるということが、本当に授業の中では特に大事だと思っています。待てないのですよね、教師が。子どもが特に低学年だと、待って、子どもはどう考えるか、子どもの考えを聞こうと思っても、教師の指導で引っ張っていくということが往々にしてあると思います。

今のような、待って、子どもが今、何を考えているのだろうか、もう少し待って、もう少し考えさせて、そして子どもたち同士でどのように関わっていくのかというのを、今伺っていて、とても大事なことで、素晴らしい取組だなと思って聞きました。そうしないと考える力が付かないと思います。ありがとうございました。

○ (事務局) 三賀森 学校教育課長

ありがとうございます。もっともっと聞きたいところですけども、青木先生は校務等もありますので帰校されます。校長と横田先生のほうにはまだ残ってもらいますので、また、全ての質問が終わったところで、続きがあれば聞きたいと思います。

青木先生、全然準備をされていない中で、急なお願いで、ありがとうございました。また、これからもお話を聞くことがあるかもしれませんが、しっかり子どもたちのために頑張ってください。今日はありがとうございました。

○ 内中原小学校 青木教諭

ありがとうございました。

○ (事務局) 三賀森 学校教育課長

それでは続きまして、湖東中学校のほうから、学力向上支援員を活用した若手教員の育成について、お願いします。

○ 湖東中学校 石富校長

それでは失礼します。湖東中学校石富と申します。よろしく申し上げます。お手元にお配りいただいている資料を基にお話をさせていただきたいと思います。

この資料は、8月7日のところで校内教職員に配付した資料でございまして、今年の学力調査結果から、校内で早急に共有すべきことをまとめた資料でございまして。

本校湖東中学校ですが、平成28年に松浦市長にも学校のほうにおいでいただきまして、学校の現状

は見ていただいたところです。現在 360 名の生徒がおりますけれども、12 クラス、各学年 4 クラスということで、特に大きな変わりはありません。

先ほど事務局のほうからもご説明がありましたが、小学校で学習面の課題を抱え入学してくる生徒もおり、根本的に学習に向かう姿勢ですとか、家庭の学習環境、そういったところに課題を持ちながら入学してくる生徒たちを受け入れるということを、それぞれの教職員で共通理解して取り組んでおります。

今回お呼びいただいたのですけれども、はじめにそういう学校の、学力調査の結果、同じ集団の 3 年間の経年変化をご説明して、後半のところでは配置いただき、非常に力を発揮していただいております学力向上支援員、その活用についてお話をさせていただきたいと思っております。

学力調査につきましては、その左上の表を見ていただきますと、平成 28 年度、29 年度、そして 30 年度の全国平均と、本校の同一集団の変化でございます。

全体の位置については、平均との差を見ていただければと思うのですけれども、特に大きな課題でしたのは、平成 28 年度 12 月に実施した県の学力調査で、数学、松江市の平均値からも 10 ポイント差があるという課題です。非常に大きく捉えた次第です。

ただ、強みは、小学校 6 年生のときの数値もそうですけれども、国語が比較的高い数値を示しておりました。小学校 6 年生でも、平均値には及びませんが、国語 A 等についての力がありましたので、やり方を変えていけば伸びる学年だなということは共有しながら、1 年目を過ごしていただくところでございます。

そして 2 年目が県の学力調査がありますけれども、平成 29 年度より、隣におります成相学力向上支援員が学校に配置されました。数学も、これは調査実施が 12 月でございますので、その年の後半のところでは平均値に近づいてきたというところがあります。

目覚ましいのはその年の英語でございますが、平均値を大きく上回る数値が出ています。前年度からの取組もありますけれども、数学、英語につきましては全て、有免許者による TT を実施しておりますので、指導を重ねてきた成果ではないかなというような思いを持っております。

それから 3 年目、今年でございますが、全国学力調査、4 月実施でございますけれども、そういった成果が出ております。

数学 A、B につきましても、比較的正答率の平均は向上しておりますし、理科についても、平均値よりは低いですが、非常に努力しているなというように校内では評価しております。

右の分布図をご覧くださいますと、上段から国語 A についてですが、これは正答数を示しております。全問正解しますと 32 題ということですが、大体平均が 22、21 というところが全国平均のところになります。本校は、その棒グラフに表された部分です。

上位層は非常に薄い状況があります。ですが、国語 A の平均正答率が全国を超えているというのは、

要は中位から中位に達しない生徒が引き上げられていると。右のほうに引き上げられている状況がその結果になっているなどというように判断しております。

数学 A についても 2 段目ですが、全国の平均正答率は 7 問から 8 問の間になりますけれども、本校は 4、5、6 問正答、その辺りの生徒を 7、8、9 の辺りに引き上げていると。つまり、中よりやや下の生徒を引き上げているという点では、国語 A、数学 A も共通しているのではないかなというように思っております。

理科についてはそれがより顕著でして、実は、フタコブラクダとも言えますけれども、2 つの集団に大きく分かれておりますけれども、中位よりやや低い正答率の部分を引き上げて、中位のところまで持ってきている。また、中位の生徒をもう一つ引き上げているという流れがあると思います。

各教科の取組では、上位層を伸ばすという指導というよりも、どちらかという中位層、また、中位層に達しない子どもたちを引き上げる指導を全校各教科で共通して実施しているというような整理をしております。

左を見ていただきまして、生徒質問紙より抜粋をしております。これは、私が抜粋したもので、校内で教員に確認したいこと、確認したい質問紙について、または喜ばしい質問紙について挙げたものでございます。

30、58 については数学について、数学ができるようになりたいと思っている生徒は極めて多い。調査問題の時間は十分でしたかという問いに、数学 B について、足りないという生徒が非常に多くいます。

上の学力調査の結果を見ていただきますと、数学 B については全国を上回る結果にはなっておりますけれども、まだまだ自分の問題にしっかりと時間いっぱい取り組んでいる様子が見えるのではないかなというように評価したいと思っております。

46 番、これは私が非常に嬉しく思った数値ですが、「理科の授業では理科室で観察や実験をどのくらい行いましたか」というものに対して、本校は週 1 回以上が 80.7%、断トツになっています。つまり、理科教員が 3 人おりますけれども、理科室を十分に使って、実験を惜しむことなくやっていると。本当に毎時間、理科の準備をしてきております。

やはり子どもたちの意欲を喚起するといえますか、体験的な学習を増やししながら、学習に向かう姿勢をつくる。その努力がこの数値にも表れているのではないかなというように思っております。

以下、学習時間、それから学校での宿題について、11 番ですが、「学校での宿題をしますか」については、76%がしている。

その次の 12 番ですが、「家で学校の授業の予習・復習をしていますか」というのが 33%になっています。本校では、次の授業のいわゆる予習を宿題としておりますから、実はこの 11 と 12 は重なるということになります。宿題として出したものについては、生真面目さもあると思うのですけれども、

何とかしなくてはならないという努力を子どもたちは積んできている。ですから、予習をして学校に臨んできている様子はこの辺りでも分かるのではないかなというように思っております。

こういった子どもたちの変化、または状況を見ながら、全ての教職員で統一して指導しているのは、やはり提出物等をきちんと出させる。それから、きちんと書かせる。書かせる量を少なくさせない。そういったことが最低限のことですけれども、共通しながら、各教科、相互的な学習で取り組んでいるという状況があります。

学力向上支援員についてですけれども、平成 29 年度より配置いただきまして、この成相指導員ですが、以前まで安来市の中学校で校長を務めておられた先生でございます。非常に数学の指導力がありまして、本校にお招きしました。

基本的には 2 年から 3 年にわたって、継続で同一学年に付いていただいて、TT の授業の実施をいただいております。そして、その担当教員ですけれども、4 クラス担当しておりますけれども、教職 2 年目、3 年目の教員として、指導力に自分の自信のなさもありますし、何とかしたいという思いも持っている教員ですので、その教員に付いていただいて授業をしていただく。

TT の形はとっておりますけれども、指導の在り方を教師に指導いただいたり、ときには T1、T2 が変わるような形で、成相先生が指導にあたっていただく時間も 1 時間の中である。非常に緊張感のある授業が毎時間展開されています。授業後は 2 人で話をしておられる風景も非常に多くございます。職員室内でも 2 人の席を近いところに設定しながら、2 年、3 年と今、過ごしているところでございます。

校内では、言葉としては何なのですが、「責任ある TT」と呼んでいるのですけれども、どうしても TT の授業では、T1 が全体の授業を流して、T2 が個別のサポートをするという形になっていく形が多いですけれども、そうではなくて、T1 と途中入れ替わってでも T2 が出ていく、板書にも参加する。そういった形の緊張感を持った T1、T2 の授業をしていただいたなというように思います。そういったところが非常に良い成果につながったのではないかなという思いを持っております。

英語、数学でも同様のことができますので、今後、校内でも英語、数学について、T1、T2 を固定化するのではなくて、学期の途中で何回も入れ替わるような、そういった指導を今後も広げていきたいなというように思っております。

また、成相指導員への御質問もあるかと思いますが、後の質問の時間もありますので、そういったところで御質問いただければと思います。

以上でございます。

○（事務局）三賀森 学校教育課長

ありがとうございました。

それでは続きまして、本庄中学校のほうで効果を上げている取組についてお願いします。

○ 本庄中学校 糸原校長

失礼します。本庄中学校の校長の糸原と申します。

本校の取組につきまして、全校生徒 43 名という大変小さな学校ですので、基本的に全教職員で生徒を見るという体制にしております。

具体につきましては、本校で長年取り組んでいます取組について、桔梗のほうから説明をいたします。

○ 本庄中学校 桔梗教諭

それでは、よろしく申し上げます。本庄中学校の桔梗です。

それでは、お手元の資料は A4 プリント 1 枚だけなのですが、その資料に書いてあることを、実物を御覧に入れながらお話をしようと思います。本庄中学校の学力向上の取組について、大きく 3 つに分けてお話をします。

1 つ目は、左側の四角にある全職員の共通理解による学力向上プロジェクトについてです。学力向上のために、今、私たちは授業をしているのですが、その中で、誰もでやる、知っていないといけないということは当たり前のことも含めて、学力向上プロジェクトという名前を付けています。すごく当たり前のものもあるのですが、その中から今日は 4 つだけ、実物も交えて紹介しようと思います。

1 番、学力向上プロジェクト B、本当は A もあるのですが、B は速攻効果を狙うプロジェクトです。これは実物を持ってきたのですが、これは小学校 6 年の 2 月に、勉強の仕方を覚えてもらうために実際に配ったものの余りです。

小学校 6 年生の 2 月から、中学校入学に向けて、勉強の仕方を身に付けるために、各教科からプリントを貼ったものを渡します。これを 3 回渡します。その度に貼っていきます。丸付けもします。そして「中学校ではこういうことを勉強しますよ」ということももちろんのだけれども、「家でこういうことを勉強してほしい」ということを身に付けてほしいと思っています。

実際、家庭学習の時間は確保できても、勉強の仕方が身に付いていなかったら学力は付かないので、入学前というのは一番意欲に燃えているときだと思うので、そのときに勉強の仕方と、それから勉強の内容と、両方が身に付くように小学校の担任の先生にもご協力いただいて、こういうノートを配っています。

最後は入学式の日を持ってくるというようにしています。大体 2 月の半ばぐらいから始めて、去年はバレンタインの日配ったのではないかとと思うのですが、お隣の学校なので、簡単に届けた

りできることも良いなと思っています。これが入学前の学力向上です。

そして、こちらがテスト直前の学力向上のための掲示物です。これはちょうど今の時期、2 学期の期末テストの前に廊下に貼っていたものを持ってきたのですけれども、国語の予想問題が書いてあります。

国語は、2 学期は古典の勉強をするのですけれども、例えば 1 年生であれば古典で必ず出るのが故事成語という言葉なのですが、それを廊下に貼ってあって、めくってみると故事成語というのが分かります。これは 1 年から 3 年までみんなが見ることができるので、3 年もこうやってめくって、「俺たちのときに故事成語が出たから、やっておけよ」と言ってくれますので、1 年生にとっては 2、3 年生にも出る問題が教えてもらえるし、また、3 年では奥の細道が必ず出るので、3 年になったら奥の細道が出るのか。これは小学校のときも社会科で習ったな」とか、そういう勉強の見通しを持つような掲示物にもなります。毎回、いろいろなバージョンでやっています。これが学力向上プロジェクトの B です。

そして、プロジェクト X。こちらは有名な番組から名前をいただいておりますけれども、勉強に興味がある子がより興味を持って、将来すてきな人になれることを夢見てやっています。

これは、先だってノーベル賞を取られた本庶博士の新聞記事をその日に貼ったのですけれども、周りには学校図書館にあるニュートンという科学雑誌の記事から私が理解した内容をイラストで書いて、大体こういう実験内容ですよということを理科の教員に合っているかも確かめ、そういうのも貼って、興味を持ったものがより一層、知識が深められるようにということを考えていますということです。

また、勉強が苦手な子も興味を持ってくれるというのがプロジェクト Z なのですけれども、Z のほうは、勉強が苦手でもめくったら楽しい、何となく知識が付くというのを考えています。こちらはワールドカップサッカーのときに作りました。あのとき、各国の国名が漢字一文字で大体表示されていたのですけれども、ここをめくるとオーストラリアとか、そのように国の名前が大体これで意識できると良いなど。横にちゃっかり世界地図とかも貼っておくのですけれども、そうやって、少し学力が何となく付いたかなという気持ちになれるようなのを考えています。

似たようなものとして、台風の記事とかも欠かさずに貼るようにしています。

以上が学力向上プロジェクト、左側のお話でした。

それでは、右側、先ほど川上先生からも紹介していただいたプロジェクトメンターなのですけれども、これは本庄中学校、通常学級の生徒がただいま 41 人なのですが、常勤の教員は校長も含めて 10 人です。10 人の教員が 1 人大体 3 人から 5 人受け持ちの生徒を決めます。これをメンティーと呼んでいるのですけれども、4 月からその次の年の 3 月まで、固定でメンターの子とも定期的に 1 対 1 で話をします。中間テストの勉強の仕方だとか、あるいは「この高校を受けたいのであれば、こういう勉強をいつまでにしろ」とか、そういう長期的な勉強の仕方と内容について、1 対 1 で話す時間を持

っています。

今年の3年生が1年の冬休みに入る前から始めまして、今年の3年生、随分力を伸ばした結果が学力調査でも出ているのですけれども、このメンターの力もあつたのではないかなというように思っています。

3つ目の国語科の取組です。私としてはここに一番力を入れたいところなのですが、本庄中学校の国語科は私1人しかいないのですけれども、国語科は全部の教科を支える学力の基本になるところだなと思って、そういう意識を持って毎日授業に取り組んでいます。

そして、1番なのですけれども、中学校1年の入って来たときから、3年になるときにどういうことができたらかい意識させるということを授業の最初に始めています。これは卒業のときにつくる歌集です。余りなので、過年度のものなのですけれども。3年になるときにどういう表現ができるようになればよいのかということ、最初のところで意識しながら、そして「先輩って素敵だな」「こういうものが自分たちもつくれるようになるのか」と思いながら、ずっと学習していくということを意識しています。

そして、ここには学校行事の価値を高めるという書き方をしたのですけれども、最終的には卒業するときに、卒業までの思い出を短歌にすることで、学校への思いが高まったりするというのももちろんなのですけれども、そこを目指していく過程で、毎年体育祭とか修学旅行とか、あるいは職場体験とかの後で短歌や俳句を全員で作って一緒に読んだり、地域の方に読んでもらったりすることで、学んだことの値打ちがすごく言葉で凝縮して高められていくということも国語の力を育てるし、また、学校生活の値打ち、値打ちという言い方は少し合わないかもしれないのですけれども、記憶の価値も高めていくのではないかなということを思っています。

そしてもう1つ、全校生徒で43人しかいませんので、上の先輩が同じ教室に入って、例えば昨日は数学で、3年と2年が同じ教室で勉強を教えてもらうという授業をしたのですけれども、国語科でも毎年同じ教材で2年が1年に作文の書き方を教えるというのをしています。

そうやって先輩に教えてもらうことで学習の見通しもつくし、良く分かるし、また、先輩のほうは教えるために一生懸命勉強しますので、やはり教えるということはすごく力の付くことだなというように思っています。

そして、先ほど掲示物を見ていただいたのですけれども、国語でも世の中の句を取り入れるということもすごく意識しています。B型学力、やはり教科書だけ学習していったら決して力は付かないので、ちょうど良いものがなかったので、2年前の期末テストの問題を持ってきました。

18歳選挙権が法律で成立したときの期末テストの問題なのですけれども、18歳選挙権について自分はどう思うか、期末テストで200字で書かせた作文の、すごく良かった解答のコピーです。本人の了解を取って、コピーを校内に貼りました。そして1、2年は世の中でどのようなことが起きていて、そ

して3年になったらどの程度の思考ができれば良いのかが分かるし、また、世の中のことを先輩がどう思っているか知るということでも、学習の幅が広がったと思います。

ちなみに、こちらは小学校のほうにもその後で掲示していただいて、3年の最後にどういうことができるようになるのかという見通しを持ってもらう教材として掲示してもらいました。

最後にお見せするのが、お手元の資料のイラストの元版なのですが、国語で学んだことで、地域の方に喜んでもらうということもすごく大事だと思っています。これは職場体験したところに出したお礼状のコピーなのですが、俳句とイラストを付けました。国語で勉強したことで、ほかの皆さんが喜んでくださるという体験をすることも、学力を育てる上ではすごく大事なかなと思っています。

そして、資料は以上ですが、国語科のほうでは、入学したときから文字が速く書けるようになる。それから、文章を速く書けるようになる。この2つを徹底してトレーニングします。大体、3年の今の時期でしたら、5分で200字の文章は全員が書けると思います。内容によりますが。

あと、原稿なしでプレゼンができるということも、徹底して鍛えるようにしています。昨日の授業でも、1年生が原稿なしのプレゼンを全員がして、大変良い評価をいただいたように思っております。

本庄中学校は以上です。ありがとうございました。

○（事務局）三賀森 学校教育課長

ありがとうございました。内中原小学校の後、湖東中学校と本庄中学校の学力向上対策について、発表をしていただきました。

それでは、この各校の取組によりどのような変化が見られたか。また、学力向上対策として成果を上げている教育先進地域と呼ばれている他県の取組について、事務局のほうから説明をさせていただきます。

併せて、それらの取組を受けまして、松江市の今後の取組について、事務局のほうから提案を説明させていただきます。

○（事務局）学校教育課 川上 指導研修係長

それでは、続けて説明させていただきます。10ページの資料4をご覧ください。

平成29年度に学力向上支援員配置校が6校ありました。その6校において、同一集団の児童生徒の県学力調査結果を比較したものです。青色の平成28年度から、配置後のオレンジ色の29年度に、どのように変化したのかをグラフで表したものです。

配置後、十分な成果が得られなかった学校もありましたが、多くの学校で配置後の29年度には、県平均との差が縮まってきています。特に支援員が大きく関わった算数、数学では、この1年で10ポイ

ント以上差が縮まっている学校が複数校あるのが分かります。この算数、数学では以前から少人数授業、特に習熟度別少人数授業が有効であると言われていました。

11 ページの資料 5 をご覧ください。こちらに国立教育政策研究所において、平成 24 年度から 25 年度にかけて行われました研究成果の検証結果が報告されています。

この報告では、習熟度別少人数授業を行うと、習熟の遅いグループの児童生徒の学力を底上げする効果があること。また、習熟の早いグループの児童生徒の学力を伸ばす効果があるというように報告されています。実際に、松江市内で習熟度別少人数授業を行っている学校の児童生徒の声からも、学習意欲の向上につながっていることが分かります。

学校現場の先生方からの声も、多くの学校で、県が行うきめ細かな学習指導として、少人数指導に係る加配を希望されている学校は多く、特に算数、数学で TT 授業、あるいは少人数指導を実施している学校が非常に多いです。

12 ページには、保護者からの声もまとめております。こちらは平成 21 年度に保護者対象に実施した調査結果によるものです。

小中学校ともに、学校に求める学力として優先順位の高いものは、国語、算数などの小学校では 4 教科、中学では英語を含めた 5 教科の力を 8 割近くの保護者が捉えています。そのために学校や行政に求めるもののトップは、子どもたちの理解力に応じて、学習内容を工夫した習熟度別の授業という結果でした。

続きまして、全国でも教育先進地と言われる秋田県、福井県における学力向上に向けた取組にも注目してみました。13 ページの資料 6 をご覧ください。

両県につきましては、厳しい現状を生き抜く勤勉で連帯感のある地域や風土、児童生徒の素直さと真面目さ等の共通する要因が挙げられています。

福井県では、県学力調査を実施し、児童生徒がどんな間違いをしたのかを見ていく解答類型を使って分析を先進的に行ったり、地域や家庭の協力を得ながら教育活動を進めていたりしています。

秋田県では、県を挙げて少人数学習推進授業を多額の予算を投じて行っていたり、算数、数学学力向上推進授業を行ったりされています。各学校においても「授業のスタンダードの確立」として、今では当たり前となった本日の授業の目当てや振り返り、この徹底などが行われています。

両県のこれらの取組は、後に多くの県で、もちろん島根県でも学力向上として、各校の学力向上対策として取り入れられています。

両県の取組を松江市でも学んでいこうと、市の校長会が主体となりまして、平成 27 年度には福井県福井市に、平成 28 年度には秋田県東成瀬村に視察に出かけております。この視察から、各校で独自の取組が進められていることはもちろん、行政が学校現場をサポートする授業を積極的に行っていることも分かってきました。

そこで、松江市として本日発表いただきました3校の効果性の高い取組や、教育先進地の取組等を参考にしながら、今後の学力向上対策として取り組みたいことを14ページの後半にまとめました。

1つ目は、現在行っています学校訪問指導を充実し、本日発表いただきました3校の取組や、学力向上に関する情報等を学校現場に提供し、市内外の効果的な取組等の共有化を図っていくことです。

2つ目は、現在4校に配置しております学力向上支援員、2校に配置しています学力向上非常勤講師を増員し、児童生徒の学習支援、習熟度別少人数授業の推進を図ることで、児童生徒の学習内容の深い理解につなげるきめ細かな教育の充実を図るとともに、先生方、特に若い先生方の授業力、指導力向上に取り組んでいくことです。

3つ目は、子どもたちの学力の育成として、小学校4年生と中学校2年生を対象に、市独自の学力定着診断テストの実施を提案します。こちらについては15ページの資料7をご覧ください。

小学校4年生においては、特に学習内容の難易度が上がるというように言われています。高学年に上がる前の段階では、それまで習った学習内容の定着を図ることが有効だと判断し、小学校4年生での実施を提案するわけです。

こちらは、事前に全国学力調査問題を活用した問題集を作成し、4月に学校に配布します。各校でテストまでに問題集を計画的に活用することで成果につながりやすくし、児童の学習への取組に対する達成感や意欲の向上につなげていくものです。テスト問題には基礎問題と発展問題を盛り込み、自分の学習の定着度を把握し、高学年に向けた意欲付けを狙いとしています。

中学2年生においては、各自の課題を捉えて今後の進路につなげていく上で、大切な時期となります。これまでの単元の定着を生徒個人が市全体の中で捉えていくことで現状や課題を捉え、改善に向けた取組につなげていくことを狙いとしています。

各校においても、テスト結果から児童生徒の課題を把握し、補充授業や補充プリント等の対策を行っていただくとともに、先生方もテスト結果から見えてきた課題を基に授業改善を行い、授業力向上につなげていただけたらと考えています。

このテストは、小学4年は県学力調査が行われる当日に、中学2年は全国学力調査が行われる当日にテストの実施を考えております。

16ページにテスト実施に向けた流れのイメージを載せております。まだ素案の段階ですが、どのように実施するのが良いか、今後考えていきたいと思っております。

以上で説明を終わります。

○（事務局）三賀森 学校教育課長

今、説明が終わりました。それでは湖東中学校、本庄中学校、また、先ほど内中原小学校の発表について、何かもう少し聞きたいなということがあれば、そのことも併せまして、これから質疑応答並

びに意見交換に移らせていただきたいと思います。

先ほどの各校からの発表、提案を踏まえて、どなたからでも構いませんので、御質問や御意見等がございましたらお願いいたします。

○ 清水教育長

本庄中学校の取組でお伺いというか、感想も含めて話をさせていただきたいと思います。

こうして全国学力テストの結果等も見ましても、実は本庄中学校というのは、平成 26 年から常に上位、ベスト 3 までに入っているということで、私はこう思ったのです。

こういう年度年度の結果は、そのときの生徒で結果が違ってくるということが言われるのですけれども、今の本庄中学校を見ると、5 年間ずっとその位置にいるということは、生徒ではなくて、場合によっては指導力、授業力、このことのほうがより重要ではないかなということを実に表しているのではないかなというように思いました。

もちろん生徒の頑張りもあると思います。努力もあると思うのですが、教えることの工夫というのがすごく大切だなというように思っていて、これはすばらしいことだなということで、教育委員会もいろいろな面で、本庄中学校の取組をもう少し詳しく教えていただきたいなと思いますが、校長先生、それから桔梗先生、どうでしょうか。自信を持っていただいて結構だと思うのですが、何が一番今の結果に影響していると思われませんか。

○ 本庄中学校 糸原校長

それでは、私のほうから。私は今年度の 4 月から赴任をしましたがけれども、数学の教員も今年から来まして、この数学の教員は、個人的に数学の研究を非常に熱心にやっていて、全国でも発表するような教員なのですけれども、その教員の話だと、非常に数学でいろいろなことをさせて、例えばレポートを書かせると非常に良く書き、びっくりする。あるいは書かせてくれというぐらいの熱意がある。これは隣の本人から言いにくいので私から言いますが、国語で取り組んでいる、この成果だと本当に思います。

やはり国語の取組がベースになって、数学、あるいは理科も非常に点が高いのですけれども、問題文を読んだりとか、何が問われているかとか、そういうことを理解するのは、やはり言語の力、国語の力が非常に大切だと思います。最近、「教科書が読めない子どもたち」という本が新井紀子から出ておりますけれども、やはりその辺りのことが、5 年間、桔梗教諭のほうを中心になって取り組んだ成果ではないかなと思っています。

○ 清水教育長

桔梗先生、何かありますか。

○ 本庄中学校 桔梗教諭

皆さんの前で校長から褒められて大変嬉しいですが、後は国語Bのほう、結構ずっと良い結果だったかなと思うのですが、私なりにどうしてBが良いのかずっと考えてきて、その結果、今現在思っていることなのではございますけれども、やはり授業と世の中をつなぐということを意識することがすごく大事だと思います。

全国学力テストの問題を見ますと、文章を読んで、その中だけで考えていたら決して解けない問題ばかりです。図を見たり、グラフを見たり、あるいは今までの自分の人生経験と照らし合わせたりというような、いろいろ書いていないことを自分の中で結びつけないといけないので、多分これはOECDのPISA型読解力と似ていると思うのですが、ということは、国語の授業の中でも、教科書の読み書きだけでは決してB型は伸びないと私は思うので、それで新聞記事を取り入れたり、あるいは今日のニュースで思ったことを言うとか、世の中と自分の意見を結びつけるということを読む、書く、聞く、全部でやっているのが実を結んだかなというように思っています。

○ 清水教育長

ありがとうございました。

○ 金津 教育委員

教育委員の金津でございます。今日はお忙しい中、ありがとうございます。

本庄中学校さんは取組をいろいろされていて、私も普段、企業の経営に携わっておりますけれども、つくっておられるものがまるで経営という経営方針だとか経営計画のような感じの印象を持ちました。

そして、このように成文化して、先生方で共有するということが非常に大事なのかなということを感じました。長期の視点を持つ個人指導という面でも、1対1で面談をして、長期的な学習作戦を立てるとあります。まさにこれは企業でいう目標管理みたいな感じのことで、本当にすごい取組をされていると感心していましたが、資料9ページの下の宿題の出し方やチェック体制で、何かユニークな取組というのがあるのでしょうか。あったら教えていただきたいと思うのですが。

○ 本庄中学校 桔梗教諭

言われるかなと思って持ってきました。入学するときに、こういう家庭学習の手引きというのを入学式の日配ります。これは毎年更新なのですが、中に各教科の、2ページ目は各教科、月曜日から金曜日まで、月曜日が国語で、金曜日が英語なのですが、毎日1教科ずつ、必ず家でし

てくる課題が出ます。そしてどんな課題が出るのかもここに書いてあるので、忙しかったら月曜日のうちに火曜日のものをすることも可能です。これを基に毎日課題をして出します。

それを教科担当がチェックするのではなくて、担任とか、学年の副担任がチェックをして、やっていなかったら休み時間にするとか、あと、数学だったら、丸付けしていなかったら、きちんと丸付けをするところまで見るとか、あるいは私は国語なのだけれども、英語のスペルが違っていたら、中学校程度なら直せるので直すとか、そのようなこともします。

そして、何分勉強したか、島根県は家庭学習が一番少ないそうですけれども、何分学習したかをずっと記録しています。これは4月からずっと重ね貼りしているのですけれども、ずっと記録して、パソコンで集計しています。そして、「1学期の間にあなたは何分勉強していました」とかというのも学期末に集計を出して、保護者さんにお渡しをしています。そのときに担任は通知表に所見を付けますけれども、担任ではないものが家庭学習についての所見を書いてお渡しして、「家でこういうことを勉強すると良いよ」ということをご家庭と共有するようにしています。というお答えで良いですか。

○ 金津 教育委員

はい、ありがとうございます。本当にすごいなと思ったのですけれども、子どもたちは時間を細かく管理されているという感覚は持っていないのですか。

○ 本庄中学校 糸原校長

それはそこまで聞いたことがないので。ただ、私自身もメンターという制度で生徒を3人、この子が校長先生の担当ですからという程度の話ができる機会を設けてもらったので、とても何というか、普段そんなに校長と何人かの生徒でじっくり話す時間はないので、非常にありがたいなと思っています。

あと、やはりこの宿題を取り組むということで、教科のほうから出して、それを学年部なり担任がチェックをする。みんなでやっているというところで、教科担当もきっと、定着がなかなか難しいのだけれども、それを手伝ってもらおうというのは変な言い方ですけども、それをやってもらおうというのは非常にありがたい。ですから、例えば授業ではそれに乗かって、少し発展的なことができるようになるというところが、学力、力が伸びていくことかなと思っています。

○ 金津 教育委員

ありがとうございます。

○ 多々納 教育委員

関連しまして、よろしいでしょうか。今、宿題の話が出ておりますが、内中原も湖東も本庄も素晴らしい実践をなさっていて、各学校の生徒や先生方の特性を生かしたすごく良い取組によって、成果を挙げていらっしゃいます。「これをこのようにすると、こうなった」ということを今日、私たち拝聴したのですが、松江市の学校全部に報告していただいて、各学校で少しでも取り入れるところがあれば、是非取り入れていただきたいなという、そういう思いを強く持ちました。

それから、宿題のことなのですが、毎年の調査でも、先ほども桔梗先生のお話がありましたが、島根県の子どもたちは、宿題の時間が全国一少ないというようなことで、やはりこれは学力の定着という面で大きな影響があると思うのです。そうして私どもがお願いしますときに、「なかなか宿題を出すのが大変だ」、あるいは「宿題を出すと、見なければだめだ」という話も聞くのですが、本庄中学校のように、担任の先生だけではなくて、手の空いている先生というか、先生方みんなで子どもたちの宿題も見ていると。そうすると、そこから分かることを先生たちがアドバイスできるというのは、本当に子どもたちと先生とがすごく良い関係で、伸びる、そういう環境にあると思うのです。

これは本庄中学校のように小規模だからできるのか、あるいは中、大規模でも、工夫するといろいろとできることがあると思うのですが、その辺りはいかがでしょうか。

それからもう1点、関連しまして、湖東中学校の校長先生のお話で、子どもたちはすごく数学ができるようになりたいし、勉強もしているのですが、学校の授業以外に、普段1日当たりの勉強時間、そこが少し全国に比べて低いように思います。

ですから、これをどういう方法で宿題をもっと、濃密な宿題を出していただいて、そういう工夫をしていただくと、もっと伸びるのではないかなという、そういう期待が持てる子どもたち、意欲はすごくありますので、予習、復習もしていますよね。ですが、宿題をして、まだ余裕があるという、そんな状態ではないかなと、そのような感じが説明していただきましたデータから感じたところなのですが、宿題に焦点を合わせると、本庄のように小規模だからできること、大規模校でも工夫できることはいろいろあるのではないかなと思いますので、その辺りをご検討いただくと良いなと思います。

○ 湖東中学校 成相学力向上支援員

湖東中学校の学習支援員の成相と申します。先ほど本庄中学校のほうでも、宿題を副担任の先生等も合わせてということでしたけれども、本校は校長が申しましたように、各教科、学力がというか成績が上がってきているのですが、それは毎日、復習の学習ノートを全員に提出させています。それを必ず副担任が毎日チェックしています。やはり、させるだけではなくて、必ずチェックして、コメントを書いて返すことによって身になるわけですので、学校としてそういう取組を、360人の学校なのですが、教員が手分けして、学年部で毎日やっておられます。

その中でも、別に数学は数学で、私もTTというのと、どのように捉えられるか分かりませんが、

当然生徒の学習の支援もあるのでありますが、数学の課題のチェックとか、毎日小テストをしているのでありますが、それは私がやっています。

ですから、教科担任の先生は非常に忙しいですし、担任もあるし、いろいろな校務がありますので、その時間を確保してあげたい。そのためには、私がそういう話し合いで、先生との話し合いで、この部分については自分が課題を提出し、出させて、チェックをして返して、小テストも毎日やるというようにしていますので、やはり先生方の少し分業をしないと、ただ「宿題やれ」ではなかなかならないので、それをいかにチェックして、評価して、励まして、次につなげるかだと思います。

ただ、そうはやっているのですが、おっしゃるように家庭学習は努力しておりますけれども、なかなかならないのですが、そうやって本校も協力しておりますし、各教科でもそのようにしております。

○ 多々納 教育委員

働き方改革とも関わるとは思いますが、やはり先生方のそういう人的な力とか、一人一人のちょっとしたそういう時間がないと、宿題に関しても、「やれ」だけでは効果が上がらないということですね。分かりました。

○ 松浦市長

その宿題と家での学習時間というものが湖東中学の資料に書いてあるのですが、先ほどの説明でいうと、この11番、12番で学校の宿題、あるいは予習、復習というものについては、全国あるいは島根県に比べても非常に高い状況になっていますよね。

それに対して、この14番の学校の授業時間以外に勉強時間がどうかというのを見ると、1時間以上のところに大体固まるか、あるいは30分と言いますか、湖東中学校の場合は固まっていて、逆に、例えば全国を見ますと1時間以上、あるいは2時間以上といったところに固まりがあるのですが、この辺りはどのように見ておられるのですか。時間の問題もありますか。

○ 本庄中学校 糸原校長

時間の問題ではないとは申しませんが、やはり時間、絶対的な時間というのは非常に大きいと思います。先日の新聞にも掲載されておりましたが、本校の課題としては、主体的な家庭学習になっていないというところ、主体的な学習へのつなぎにまだまだないというところが背景にはあると思います。

主体的な学習というのをどう考えるかですが、例えば、外発的な動機づけとしては高校入試を見据えたような、また、その先を見据えたような学習をしている子たちがまだまだ少ないとか、そ

の日その日の、次の日に先生たちに提出しなくてはならない学習、注意を受けない学習が中心になって、そこで留まっている子たちというのは、現実的には多くございます。

○ 松浦市長

やらされているという感じですか。

○ 本庄中学校 糸原校長

出されているものに対しては、きちんと応えようとする。けれども、やはり主体的に、「もっと数学を」とか、「もっと英語のこの辺りを」とか、「2年生の内容を」という学習まで及んでいる子はまだまだ少ないなというように。

○ 松浦市長

それをやらせるにはどうしたら良いのですか。

○ 本庄中学校 糸原校長

大きな意味で言いますと、やはりキャリア教育とか、そういったことを学校はすべきことだと思っています。先を見据えて、今、何をすべきかとか、体験的な学習も含めてです。

やはり子どもたちというのは、小中でかなり変わってくるのは、子どもそれぞれの考えというのはしっかりしてきますし、親からも分離していきますので、自分の人生を見据えるような、総合的な学習をどれだけ充実させていくかということを考えていかななくてはならない。主体的な学習に持っていかななくてはならないなという思いは、課題は大きく感じております。

○ 伊藤 教育委員

市長、よろしいですか。

○ 松浦市長

どうぞ。

○ 伊藤 教育委員

本庄中と湖東中になんか一つずつお願いして終わります。2校ともすばらしい取組を発表いただきまして、本庄中の先生の発表で、書くこと、文字を書くこと、文章を書くこと、是非これは継続していただきたい。具体のほうが、授業と世の中をつなぐということをおっしゃいましたよね。こういう授業が

私、必要だと思うのです。

島根県の学力調査で、無回答が非常に多いのですよね。それはやはり、何かのデータや記事などで、自分のものの見方や考え方も身に付けていないこととかが多いと思います。自信がない。

ですから、是非授業をつなぎながら、新聞記者の方も今日は来ていますけれども、NIE で取り組むとか、「この記事を見てどう思う」というものの見方とか考え方を是非書かせてほしい。その辺り数学で「先生、書かせてくれ」という授業ができていたと校長先生がおっしゃられていた。是非そういうのを継続してお願いします。

湖東中のほうですけれども、ティームティーチングの成相指導員さん、大変お世話になっておりますけれども、ティームティーチングで、校長先生の言葉で「責任ある TT」とおっしゃられた。私、一人一人若い先生を育てるのは、T2 ばかりではだめだと思います。おんぶにだっこにしまうと、どうしても必死さがなくなるので、途中で入れ替わるような授業を組んでいると。責任ある TT をするのだという、校長先生も成相先生もそのほうで意図的に、「ここからはあなただよ」というような、その若い先生が「自分がやる」という気持ちで、大先輩の姿を追っていかなければいけないと思います。どうかよろしくお願いします。

以上です。

○ 清水教育長

内中原小学校さん、話題に出ませんでした。今、大量に先生方が辞められるので、授業力というか、新しい先生が授業力を育てられるか、育成できるかというようなことが大きな問題になっていますよね。そういう意味では、今やっておられることというのは、内中原でモデル的にやっていたているのですけれども、すごく評価ができることで、将来の学力育成のために、是非頑張っていたきたいと思いますし、それから、また何年かしてから検証を、教育委員会も協力をさせていただいて、良ければまた普遍的に広げていくということ、私は必要だと思っています。

それから、リーダー教員を選ぶときに、校長先生、なかなかどの先生をとというのは、横田先生に実力があるのは分かりますけれども、そういうことは校長先生が「この人をリーダーに」と選んでいますか。

○ 内中原小学校 奥村校長

基本的にそうです。

○ 清水教育長

独断ですか。

○ 内中原小学校 奥村校長

はい。

○ 清水教育長

分かりました。なかなか大変だったのではないかなと思います。

○ 内中原小学校 奥村校長

はい。しかし、頼んでいる2人は意気を感じてやってくれる教員なので、それが一番嬉しいですし、いろいろなアイデアを自分たちから出してくれるのです。やらされているより自分たちでやってくれているなということが感じられます。

○ 清水教育長

そういう先生にリードしていただくのが一番良いのかなと。頑張ってくださいと思います。

○ 松浦市長

少し申し上げにくいことがあるのですが、秋田県がものすごく成績が良いということで言われているわけですが、では、高校以降になったらどうなのかというと、何となくあまりパツとしない感じが。良く分かりませんが。それはどうしてなのかということを考えたときに、私自身の経験からいうと、私は中学校が附属中学だったのですけれども、附属中学の悪口を言うわけではないのだけれども、結構中学校のときに、先々に授業をするわけです。ですから、高校1年に入って少し経ったぐらいの授業まで中学校のときにやってしまう。

そうすると、これは私の経験ですから、今はどうなっているのか分かりませんが、高校に入った人たちの中で、例えば1学期などの授業をやっていると、もう習ってしまったような授業をやるので、あまり学習意義が分からない子が出てきたりします。

そうすると、しばらくすると附属中学から入ってきた子というのは二層化されて、良くできる子は伸びるのですが、そうでない子はもう下位のほうになり、そういう顕著な様子が出てくる。今日の3つの学校に共通する話というのは、やはり学習意欲にしても何にしても、自分で考えさせるということがやはり一番大事なのかなという感じがします。今、いろいろお話を聞いてると、そのようなことに知恵を絞っておられるというように思いましたので、非常に遠回りのような感じがするのだけれども、私自身は本当に子どもが伸びるのは高校の年ではないかという気がするのです。

ですから、そういう素地をつくってあげるとするのが非常に大事なのではないかと考えていて、そ

この辺りを是非普段の授業の中で工夫をしていただくと大変ありがたいなというように私は思います。少し抽象的な話になって恐縮なのですが。

○ 藤原 教育委員

教育委員の藤原でございます。今日は大変すばらしい取組についてお聞かせいただきまして、ありがとうございました。

横田先生のお話を伺ってしまして、本当に子どもの特性を考えながら、愛情を持って人として育てようとしてくださっていることに本当にありがたいと感じました。

全ての先生方がきっと皆さんそういう気持ちでやったださっている思うのですけれども、限られた時間の中でたくさん子どもたちに伝えていくというのはすごく難しいことだと思いますので、先生方が紡いでこられたことを新しい先生方に伝えていただけるということが本当にすばらしいなと思いました。

安心感という言葉がすごく印象に残りました。学ぶスピードが早い子どもさんも遅い子どもさんもおられますけれども、自分が間違っても、失敗しても受け入れてもらえる、自分で決め、納得するなかで学ぶことができる環境をつくり、支えていただけているということがとてもありがたいと思いました。

本庄中学校さんでも、一人一人の先生が少ない子どもたちを担当して、1対1で話をしてくださるということでしたが、この先、自分がどのようになっていきたいとか、いろいろな話をしながら学習につなげていける、自分の話をしっかりと受け入れてもらえるという環境が整っているということは、学習に対する意欲なども非常に湧いてくると思いますし、すばらしい取組だなというように感じて聞かせていただいております。

湖東中学でも、同じ子どもがどのように変化をしていっているかという調査などで、国語力がある子どもたちなので、やり方を変えていけばこの子どもたちは伸びていくというような、今いる子供たちがどのようにすれば力を発揮できるのかということなどについて、いろいろと研究を重ねておられると聞き、ありがたいことだと思いました。やはり国語力というのは、いろいろな勉強の基本となるとても大切な力だと改めて思いました。私も子どもがおられますけれども、そういった点をしっかりと踏まえながらいろいろと伝えていきたいと思っておりますし、松江市の子どもたちが国語力、人にもものを伝える力を伸ばしてゆけるとよいと思っております。

非常に拙い感想で申し訳ありませんが、大変勉強になりました。これからの松江市の子どもたちのため、このように研究を重ねてくださっている先生方が支えてくださっているということを、とてもありがたく思います。

○（事務局）三賀森 学校教育課長

ありがとうございました。委員さんから出された質問というのは、本当に事務局側として聞いておりましても、とても身に詰まるものであります。

教育というのは、やはりものをつくるわけではないですので、人を育てるということになりますと、すぐ答えが出るものではありません。その中でも、子どもたちが将来生きていく上での本当の力を付けてやりたいということで各学校が頑張っておられます。私たちもそれに向けてしっかり支えていきたいと思っています。

最後に、本庄中学校の校長先生、桔梗先生、答えられたらで良いのですけれども、多々納委員から、「今やっておられる取組が、本庄中は小規模校だけれども、中規模校、大規模校だとうどうだろうか」という質問があったのですが、何か今、思いつくことがあれば教えていただければと思うのですが。

○ 本庄中学校 糸原校長

やれることとやれないこともあるのではないかなと思いますけれども、湖東中学校も言われましたけれども、例えば宿題のチェック等々は可能ではないかなと思います。

それから、桔梗教諭のほうが言いましたけれども、やはり勉強のやり方を最初のうちに教える。それを踏まえて後は主体性、自主性ということでやらないと、最初から自主性、主体性となると、何をどうやったら良いか分からないということになる。私も本庄中学校に来て勉強させていただいたのですけれども、どうしても自主的にというようなことが、中学1年生、案外、2年生も3年生もかもしれませんけれども、勉強の方法というのをどうやって良いか分からない子がいるのではないかなと思います。そこの辺りは大規模校でも中規模校でも取り入れるのは可能ではないかなと思います。

○ 多々納 教育委員

小学校のうちに中学校ではどんな勉強をするかとか、小学校のまとめみみたいなノートを見せていただいて、松江市の小中連携の良さがそこに出ているのではないかなという学び方も含めて、しっかり小学校でできることは小学校のうちに身に付けるという、そういうところをもっと広めていただけると、子どもたちもしっかり力が付くのではないかなということを感じました。ありがとうございました。

○（事務局）三賀森 学校教育課長

ありがとうございました。

このテーマにつきまして、まだまだ御意見あるかもしれません。そのことにつきましては、またこちらのほうでお伺いしまして、委員にお伝えしたいと思います。

それでは、このテーマにつきまして、古藤副教育長のほうからまとめさせていただきたいと思えます。

○（事務局）古藤 副教育長

失礼いたします。副教育長の古藤でございます。十分なまとめにもなりませんでしたが、今日はいろいろありがとうございました。

内中原小の取組につきましては、若手教員のスキルアップに大変有効であるというようなご紹介だったと思います。「是非こういったことを市内にも広げてほしい」と多々納委員からの声もあったのですが、子どもたちの安心感のある指導につながっているというご指摘をいただきました。清水教育長からは、「効果検証も必要だろう」ということでしたけれども、「良いことであれば広めていきたい」という声もございました。

湖東中の取組につきましては、責任ある TT という、キャッチフレーズではないかもしれませんが、これについて非常に高い評価をいただいたと思っています。また、支援員も担任等々の分業が必要であって、そういった意味では、責任を持った関わりについて成相支援員からご紹介いただけたと思っています。

家庭学習につきましては、主体的にやらせるのが課題であるというようなご指摘もございました。家庭背景や地域の実情もございましょうけれども、子どもたちが主体的に取り組むことを考えなければいけない、これは本庄中のほうからの話にもございました。

最後、本庄中でございますが、いろいろ先進的な取組ということで、「是非続けてもらいたい」というような言葉をいただいております。「市内全体にもご報告して取り組めるものについては、中規模、大規模校でもできることは取り入れていく」、そういうことで校長先生からもお話がございました。子どもたちの主体性や自主性ということは先ほども校長先生からご指摘があった通りでございます。

市長が先ほどまとめていただいたと思いますけれども、「学習の指導というのは、自分でできる、あるいは自分で考えさせること、こういったことの重要性があるのではないか」ということをおっしゃっていただきました。

子どもが伸びるのは、高校時代でも大変伸びるものがございます。そういった意味でも、「遠回りのようであっても、是非素地をつくる努力をしてほしい」という市長からの言葉がございました。

教育委員会といたしましても、こういった今日のお話を基にしまして、今後取り組んでまいること先ほど3点ご紹介しております。訪問指導、学力向上支援員や非常勤講師の増員、学力定着診断テスト、こういったものを考えてまいりたいと思えます。予算との兼ね合いもございしますが、今後検討してまいりたいと思えます。

そういったところで今日のまとめとさせていただきたいと思います。大変簡単で申し訳ございませんが、以上とさせていただきます。

○（事務局）三賀森 学校教育課長

ありがとうございました。

時間が押して大変申し訳ありませんが、もう1つ議事を用意しております。教育大綱の改定につきまして、事務局のほうから説明させていただきます。

○（事務局）杉谷 教育総務課長

教育総務課の杉谷でございます。学力の育成についての議論が非常に伯仲いたしましたので、時間がもう予定の時間になっております。簡単にご説明を申し上げまして、本来、御意見、質疑等につきましてはこの場でいただく予定としておりましたけれども、時間の関係もございまして、これはまた後ほど御意見、御質問等をいただければと思っております。簡単にご説明を申し上げます。

17ページの資料8をご覧くださいと存じます。松江市教育大綱の改定案を掲載させていただいております。そのあと23ページの資料9には現行の大綱、一番最後のページには資料10で、総合計画との整合を図った体系図をお示ししておりますので、ご参考にご覧いただければと思います。

この大綱でございますけれども、地方教育行政の組織及び運営に関する法律第1条の3、第1項の規定に基づき策定するものでございまして、前回は平成27年度に策定をしたところでございます。これは資料9でございます。

今回お示ししております資料8の大綱の案でございますけれども、現行の松江市総合計画と整合を取りながら、総合計画に掲載されている教育等の振興に関する施策の目標や方針を大綱として位置付けているところでございます。

1番目の策定の趣旨についてでございますが、未来を担う次世代の人材である子どもたちの育成と、郷土への誇りと愛着を生むまちづくりを進めるための取組を行っていくための、本市の目指すべき教育の方向性や実現するための方針などを示すために策定するというものでございます。

2番目の計画の期間につきましては、総合計画の終期でございます平成33年度までとするものでございます。

3番目の本市の目指す教育の方向性についてでございますけれども、総合計画で示されておりますように、将来像として選ばれるまち松江を目指していくことから、教育の分野も例外ではなく、未来を担う子どもたちを大切に育てていくことと、公民館を核としたまちづくりを進めることにより、暮らしやすく住み続けたいと思われるまちづくりに取り組むということにしているところでございます。

4 番目の教育方針でございますけれども、人を大切に育てること、誇りと愛着を生むこと、安心・安全なまちづくりを進めること、この3点を基本的な考えといたしまして、各々記載しておりますように、各施策に取り組むということにしているところでございます。

説明は以上でございます。御意見・御質問等につきましては、後日でも頂戴できればというように思っておりますので、どうぞよろしくお願いを申し上げます。

○（事務局）三賀森 学校教育課長

皆様、本日は長時間にわたりまして、貴重な御意見をいただきましてありがとうございました。

一緒に進めながら、とても良い時間をみんなで共有できたのではないかなと思っております。いただいた意見を本当に我々も子どもたちのために生かしていきたいと思っております。

以上をもちまして、平成30年度第1回松江市総合教育会議を終了いたします。本日は本当にありがとうございました。お疲れ様でした。